

令和7年度一般選抜試験

学 力 試 験

数学，物理，化学，生物，日本史， 世界史，英語，国語

令和7年1月27日 9時30分—11時30分

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 各科目の問題は下記のページにある。

科目名	数 学	物 理	化 学	生 物	日本史	世界史	英 語	国 語
ページ	3～7	8～11	12～15	16～23	24～29	30～35	36～47	49～63

国語は順序が逆で63ページ(国語1)から始まり49ページ(国語15)で終わるので注意すること。

- 3 出願時に届け出た2科目の問題に解答すること。これに違反した解答は無効とする。
- 4 解答には黒鉛筆、黒色シャープペンシル又は黒色ボールペンを使用すること。
- 5 解答は解答用紙の所定の解答欄に記入すること。
- 6 解答用紙の指定欄に志望学科・コース、受験番号、氏名を記入すること。
- 7 解答の記入の仕方については、解答用紙並びに問題の初めに書いてある注意に従うこと。
- 8 本冊子の余白は計算・草稿用に使用してよい。ただし、切り離さないこと。
- 9 試験時間内の答案提出、退室は認めない。
- 10 問題冊子及び解答用紙は、全て回収するので持ち帰らないこと。

学 科 ・ コ ー ス		受 験 番 号							氏	
									名	

上欄に志望学科・コース、受験番号、氏名を記入すること。

国語

問題〔一〕～〔四〕のうち、〔一〕は必ず解答すること。また、〔二〕～〔四〕のうち二つを自由に選んで解答すること。
なお、問題の中で字数が指定されている場合は、特に指示のない限り、句読点等を字数に含めること。

〔一〕 次の文章を読んで設問に答えよ。

退院して、もうひとつ積極的に取り組んだのは、自分の障害、高次脳機能障害こうじのうきのうしやうがいについて調べることだった。さいわい時間はたっぷりある。最初は不自由だった読むことも、繰り返しチャレンジしていたら、やがてすんなりと読めるようになった。わりとしつこい性格なのが、功をソウaした。がむしゃらに読んだのがよかったのかもしれない。

同じ箇所を何度も読むので、本の内容が思ったよりも頭に残ったようだ。これも **A** である。繰り返し練習することが、リハビリに多大な効果をもたらすことを体で知った。

高次脳機能障害。続けて読むと、人間の頭の中に「高次脳」という部分があると誤解されがちだが、そうではない。より正確に表現するなら、「高次の脳機能の障害」ということである。つまり思考、記憶、学習、注意といった人間の脳にしか備わっていない次元の高い機能が、脳の損傷によって故障する、あるいは失われる障害をいう。

脳卒中のうそちゅう以外にも、交通事故などによる外傷性の脳損傷、自己免エキb疾患、アルコールや薬物などの中毒疾患で起こることもあるという。

ちなみに脳卒中の後遺症として代表的なものに、知覚や運動などの「麻痺まひ」があるが、これは進化の進んでいない動物にも見られることで、高次脳機能障害とは呼ばない。

では具体的にどんな症状が見られるのか。 **B** 調べていくと、これまたびっくりするような話が出てくる、出てくる。

靴ひもを結べない。洗濯せんたくキやテレビの使い方がわからない。スプーンやフォークをどう持っていかわからない。箸はしが使えない。はみがき粉のチューブで歯を磨こうとする。長年住んでいる自宅の間取りを忘れる。近所で迷子になる。「敬礼をしてください」と言われているのに「バイバイ」と手を振る。隣に座っている友人を見て「猿がいる」と言う。鉛筆を見ながら「消しゴム」と言う。ボールペンで髪をとかそうとする……。

幼い子どもの話ではない。立派な成人が実際にした話である。要するに、正常な人間であれば無意識のうちになんの苦勞もなくできることを、忘れてしまっているのだ。ひどいときには、日常生活ができなくなる。

私も健康なときだったら、「ほんまかいな」とツツコミのひとつも入れたかもしれない。大の大人がそんなふうになるなんて、信じられない。

C 自分も後遺症を持つ身になってからは違う。どれもありうる話だろうと、心底納得できた。何があってもあまり動じないほうだと思いが、さすがに今回だけは、事態は深刻そうである。実際、毎日が自分につながりさせられることの連続なのだ。

子どもの幼稚園に持っていくものを忘れる。お休みの日に登園してしまう。お迎えの時間を間違える。探し物が見つからない。自分の住所や名前を書かずに郵便物を出してしまう。こんなことばかりだ。そして何より、次々と失敗をやらかす自分を、私自身^①がなかなか受け入れられない。情けなくしてしょうがない。

「何やってんだろう、私」

そう。高次脳機能障害の本当のつらさがここにある。おかしな自分がわかるからつらい。意識レベルが低い状態なら、まわりには迷惑をかけるだろうが、自分としてはたいして気に病むことはないかもしれない。

C 高次脳機能障害では、知能の低下はひどくないので、自分の失敗がわかる。失敗したとき、人が何を言っているかもわかる。だから悲しい。いっこうにしゃんとしてくれない頭にイライラする。度重なるミスに、我ながらあきれるわ、へこむわ、まったく自分が自分でいやになる。見た目には「ちょっとトロイ人」くらいにしか見えないため、街に出てても他人様は冷たい。

肉親くらいは優しくしてくれるかというところ^dがどっこい。病気前のイメージが抜けないせい^dか、もう治ったと思いたいのか「しっかりしろ」とヨウ赦ない。B 落ち込む。

だがその反面、私は高次脳機能障害という未知の世界に、医者としてひどく心奪われていた。どんな本にも書かれていない^②摩訶不思議なことが、毎日、私自身の身に起こるのだ。その理由を、そのメカニズムを知りたいと思った。

私の脳の外にいる人にはけっしてのぞくことのできない、私だけの世界。脳が壊れた者にしかわからない世界。正常な人は気づかない、誰も立ち止まって見たことのない脳の中。みんな頭に、ちゃんとひとつずつのせて生きていくというのに。

高次脳機能障害は、裏を返せば壊れた脳の部分が正常であったときにどんな役割を果たしていたかを教えてくれるものでもある。手当たり次第に本を読むうち、壊れた脳の示す症状から、正常な脳の同じ部分が何をしているのかを知る学問を「神経心理学」と呼ぶことを知った。

自称、学究肌。じつは単なるオタクの私は、「めっちゃおもしろい」と思い、その分野にのめり込んでいった。

(中略)

独学を続けるうちに、病気になることを「科学する楽しさ」にすりかえた。自分の障害を X に面白がれるようになれば、こっちのものだ。

これまでやってきた数々の失敗も、理由がわかると「なあんだ、そういうことか」と

Y

。

だいたいやりそうな失敗も見当がついてくるから、ちよつとやそつとじゃ驚かなくなる。些細なミスに悲しくなったりイライラすることが徐々に減り、やがて

Z

余裕さえ出てきた。

「脳卒中の後遺症のおもなものに、記憶障害と注意障害があるんです」なんて言ったら、健康な人は、なんだか大変そうでかわいそう、と思うかも知れないが、実際は健康な人でも高次脳機能障害と似た経験はしているのである。

たとえば、眼鏡をかけていながら「眼鏡がない」と探したり、電車の切符をどこにしまったか忘れて改札の前でアタフタしたり、考え事をしながら探し物をしているうちに「何探してたんだっけ？」と立ちすくんだり。ポーツとしていたり、極端に疲れていたり、寝ぼけているときなど、自分でもあきれるような思い違い、勘違い、見間違いといった「うっかりミス」をすることは誰にでもある。もともと注意力散漫な傾向のある人や、高齢者ならなおさらだろう。

最初は「なんて悲惨な障害」としよげていた私だが、「なんだ、うっかりしてる人とたいして変わらないじゃないの」と気づいてからは、だいたいのことは「バツカで」。またやってもうた」ですませるようになった。

③ 神経の図太さが、私をなんとか立ち上がらせてくれた。

(山田規畝子『壊れた脳 生存する知』による)

※筆者は脳卒中中で入院していた。退院後、新米ママを集めて「子育て勉強会」を開催し、多くの人と会話したことがリハビリにつながったと筆者は感じている。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直した時、適切なものをア～オの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

a 「ソウ」	ア 総	イ 相	ウ 宋	エ 奏	オ 想
b 「エキ」	ア 液	イ 疫	ウ 役	エ 易	オ 益
c 「キ」	ア 器	イ 期	ウ 気	エ 機	オ 起
d 「ヨウ」	ア 要	イ 容	ウ 溶	エ 腰	オ 用
e 「マン」	ア 満	イ 万	ウ 萬	エ 慢	オ 漫

問二 空欄 A に当てはまる最も適切な語句を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 先見の明 イ 漁夫の利 ウ けがの功名 エ 水を得た魚 オ 焼け石に水

問三 空欄 B ・ C に当てはまる最も適切な語句をア～カの中から一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号は二度使わない。

ア さらに イ つまり ウ とても エ でも オ もしも カ そのために

問四 傍線部①「次々と失敗をやらかす自分を、私自身がなかなか受け入れられない。情けなくてしょうがない」と同じ内容を伝えている箇所を本文中から十八文字で抜き出し、答えよ。

問五 傍線部②「ま摩訶不思議なこと」の説明として当てはまるものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えよ。

- ア 人間の脳にのみ備わる次元の高い機能が、脳損傷によって故障すること。
- イ 繰り返し練習することで記憶が定着し、リハビリの効果があつたこと。
- ウ 正常な人間なら無意識のうちに苦勞なくできることを忘れてしまうこと。
- エ 正常な人が気づかないような失敗をするので、肉親や他人が冷たいこと。
- オ 記憶障害と注意障害により失敗する、おかしな自分が存在していること。

問六 空欄

X

Y

Z

に当てはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア	X	客観的	Y	気が楽になる	Z	笑い飛ばす
イ	X	主観的	Y	気が楽になる	Z	笑い飛ばす
ウ	X	客観的	Y	気がそがれる	Z	馬鹿にする
エ	X	主観的	Y	気が差した	Z	馬鹿にする
オ	X	客観的	Y	気がそがれる	Z	気を遣う
カ	X	主観的	Y	気が差した	Z	気を遣う

問七 傍線部③「神経の図太さが、私をなんとか立ち上がらせてくれた」とあるが、筆者がこの状態にまで至った理由について「から。」にした形で、三十五文字以上五十文字以内でまとめて答えよ。その際、「失敗」「経験」という語句を必ず用いること。ただし、「から。」は文字数に含めない。

(二)

次の文章を読んで設問に答えよ。

人間が赤ちゃんとしてこの世に生まれ、だんだんと大人に成長してゆく事実は、まったく素晴らしく、恐ろしいときさえ言いたくなるようなことである。生まれたときは、この世界に対して何の認識もなかったのに、現実を認知し、言葉を覚え、記憶、知識として形成し、貯蔵してゆく。その間に、自分自身の主体性を確立し、責任感をもった存在として、統合された人格をつくってゆく。これは、誰もがしていることではあるが、あらためて考えてみると、何とも偉大なことだと言わざるを得ない。

このような人格形成の過程における、物語の役割①ということについて、ここに考察してみたい。そのために、もっぱら子どもと物語について述べることになるが、それは結構、大人にとっても重要であることを認識しておく必要があるだろう。大人たちも心のなかに子どもをもっている、と言えるからである。

子どもが言語を獲得し、三歳くらいになると、何かにつけて「どうして」とか「なぜ」というのを訊きたがる。「どうして木の葉がゆれるの」、「チューリップの花はなぜ赤いの」などというのから、一日に何度も「なぜ」を連発する子どもがいる。「木の葉は、風が吹くとゆれるのよ」と説明すると、それで満足する子もいるし、さらに「どうして風が吹くの」と訊く子もいる。親がうるさくなって、「いい加減にしなさい」と言いたくなることもある。

子どもがこのように質問をするのは、事実を事実として個別に認識する②だけではなく、それらに関連づけ、それを自分にとって納得のいく形で体系化しようとするためである。ここに「体系」という言葉を用いたが、それは論理的なことだけではなく、それに伴う自分の感情などすべてのことを含む「体験」を納得がゆくようにまとめあげてゆく「体系」である。

「一匹の犬がこちらに向かってくる」という表現は、既に大人としてのものであり、子どもがはじめて犬を見たときは、「！」とでも表現したいほどの体験であろう。そこには、驚きや恐れ^{すそ}の感情が働くことだろう。しかし、そのときに共にいる信頼する大人（多くの場合、母親）が、別に怖がりもせず、「犬が来たよ」などというので、その子にとっては、「犬」という言葉を覚えるし、それほど大変でもないだろう。しかし、最初に体験した「！」というのが非常に大きいときは、それを単に「犬が来た」という表現で片づけることはできないであろう。

あるいは、子どもにとっては動かすことは不可能である机を、父親がかかるると移動させるのを見たときのその子の体験は、山を動かす巨人として表現するのが、一番ぴったりではなからうか。子どもたちの生活は、「物語」に満ちている。

このように考えてくると、子どもたちが「物語」を好むのがよくわかる。それは、大人たちが時に感じるような「絵空事」^{えぞうじ}ではなくて、「現実」そのものなのである。子どもたちの体験する「現実」を、もっとも適切な方法で表現しているのが「物語」なのである。嘘^{うそ}と思う人は、子どもに何でも

いいから物語を読みきかせてみることである。それを聞いているときの子どもの様子を見てみると、どれほど子どもがそれに惹きつけられているかわかるだろう。そして、たとえば、桃太郎の話で、桃が「ドンブラコ、ドンブラコと流れてきました」というところを好きになると、自分で「ドンブラコ、ドンブラコ」と言って楽しむ姿に、物語から受けとめた興奮が、体中にひろがっていることがわかるであろう。好きな物語は、何度でも読んで欲しいのは、すべての子どもに共通のことである。何度同じことを繰り返してもあきないのである。「子どもは仕方がない」などと偉そうに言っている大人も、「好きな物語」を何度も繰り返し返して喋っているのに気がついていないだろうか。威張っている上司をこっぴどくやつつけたとか、新しいアイデアで会社に貢献したとか、「自慢話」を家族や部下に対して、酔っぱらうたびに語り、「あー、例の話か」などと聞き手が思っているのを無視して喜んでる。こんなことはまったくくない、という人は非常に珍しいだろう。人間は生きてゆくために多くの支えを必要としており、このような自家製の物語は、その人を支える大切な柱のひとつなのである。

ある幼稚園で、まったく口をきかない緘黙の子がいた。家ではよく話をしていのだが、家の外に出ると一言も言わないのである。困り果てた担任が園長に相談すると、園長は、手がすいているときに、その子にいろいろと物語を読み聞かせることにした。はじめのうちは無表情に聞いていた子どもが、回を重ねるにしたがって表情がでてくるようになり、物語を楽しんで聞いているのがわかるようになった。園長先生の読み聞かせを楽しみに待っていることがよくわかるようになってしばらくした頃、園長が「むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました」と言うと、その子が大声で、「おじいさんもおばあさんいない！」と叫んだので、驚いてしまった。一言も言えなかった子が大声を出したのだ。

驚きながらも読みすすんでゆくと、ひとつひとつの文章ごとに、「おじいさんは山へ行かない！」「おばあさんは川なんか行かない！」と否定する。不思議に思ったし、何だかおかしくもあったが、園長先生は読み続け、その子はいちいち否定する。そのうちにたまらなくなると、園長がぷーと吹き出すと、その子も笑って、顔を見合せて笑った。このときから、その子は幼稚園でも普通に話をするようになった。

緘黙児は、怒りや否定の **A** をなかなか表出できず、そのために **B** も出せない状態になっていることが多い。この子の場合、否定文をまず叫んだ、というのもわかる気がする。ただ、そのような機会を与えるものとして、普通の会話でなく、「物語」が役立ったところが興味深いのである。この子のエネルギーを引き出すのに、物語がうまく役立ったのだ。

(河合隼雄『河合隼雄 物語とたましい』による)

※緘黙：音声器官や言語能力に問題はないが、特定の場面・状況になると話ができなくなってしまう症状のこと。

問一 傍線部①「物語の役割」について「子ども」と「物語」の関係を説明している一文を抜き出し、その始めの七文字を答えよ。

問二 傍線部②「事実を事実として個別に認識するだけではなく、それらを関連づけ、それを自分にとって納得のいく形で体系化しようとする」の説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 現実の認知は言葉を覚えて、記憶し知識として貯蔵することで深まってくため、体験によって子どもの疑問が次第に解消されていく。
イ 言葉を獲得する過程において、たくさんの体験から得た言葉を論理的にまとめあげることによって、子どもの人格が形成されてゆく。
ウ 「どうして」「なぜ」を一日に何度も問いかけることによって、不思議に思う感情と向き合いながら、子どもは体験を重ねていく。
エ 体験によって感情が動き、それぞれの体験の感情の動きにびったりする表現で子どもはものごとを受けとめ、自分のものとしていく。
オ 子どもは驚きや恐れへの感情を信頼する大人とともに体験しながら自分のものとする中で、感情の大小に関する表現と理解を深めていく。

問三 傍線部③「たまらなくなって」について、次の(1)・(2)を答えよ。

(1) 「たまらなくなって」の主語に当たるものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 担任 イ 緘黙の子 ウ 園長 エ 筆者 オ 物語

(2) 「たまらなくなって」を言い換えた時、本文の意味に最も合致するものを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 平静を装えなくなつて イ 悲しみをこらえきれなくなつて ウ 笑えなくなつてしまつて
エ 飽き飽きしてしまつて オ 怒りを抑えられなくなつて カ 集中が続かなくなつて

問四 空欄 A・B に当てはまる最も適切な語句の組み合わせを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア A 大声 B 一言 イ A 一言 B 大声 ウ A 一言 B 言葉
エ A 言葉 B 表情 オ A 感情 B 言葉 カ A 感情 B 大声

問五 「大人にとって物語がどのように役立っているか」について説明している一文を本文中から抜き出し、その始めの五文字を答えよ。

〔三〕

次の文章を読んで設問に答えよ。

数年前から、社会と個人、個人と個人、権力を持つ者と持たない者の関係性を「承認」というキーワードで解こうとする試みが目につくようになり、「承認欲求の病」や「承認を求めて果たせなかった末の犯罪」「権力者の一方的承認や承認拒否による独裁政治」「自己責任を強制された反動としての承認欲求」などという言葉に接すると、「承認」とは個人の生死を分けるような情念のひびきを持つ言葉だと感じます。その根源がどこにあるのか、承認とは何かを改めて考えてみました。

(中略)

個人であると同時に社会人である人間は、他人から承認されることを求める生き物です。他者からの承認(褒められることとは少し違う)によって、自己肯定感や自信に変わり、やる気が出て社会的な成功を収めるきっかけにもなるといわれています。

けれども社会からの承認が気になりすぎて、自分が本当は何をしたのか分からなくなったり、他者からの承認が重荷になり、期待に応えようとして無理を重ね、自由な生き方を抑圧されてうつ状態になる人や、自死する人もいます。承認されている人は幸福かといえば、他者からの承認を受け続けることに自縛^①自縛^①の人生を送る人もいます。いったん受けた承認・名誉を失いたくないという執着から科学者の良心を失って、犯罪を引き起こした人もいます。

さらに、一度受けた承認・名誉を失いたくないという執着から無理に営業成績を上げようとして、粉飾決算や、犯罪を引き起こした人もいました。

承認関係にはいわゆる自他のヨコの関係もあるし、権力者との上下関係もあります。とくに権力者の行なう承認は、(中略)自分の地位を利用し、私益のために行なう恣意的な一方的行為である場合が少なくありません。権力者が口頭で行なう承認や、あるいは部下に付度^{そえ}させる承認は、証拠を残さず目的を達することができるので、法に違反することであっても責任を問われずに遂行できる好手段だといわれます(中略)。部下たちは権力者の意向を付度することで出世しようとするため、害悪が社会全体にはびこる恐れもあります。

(中略)承認の本質は「相互承認」にあるので、上下関係の中で相互承認がどれほど根つき、浸透しているかを見ることで、民主主義社会のレベルを測ることができます。相互承認は民主主義の尺度です。

(中略)

何年か経ってあとから客観的に見ることで、人びとは、戦争時代の社会的承認基準が大きく間違っていたことに気が付きました。現在も正しい承認が行なわれているとは限りません。

平和で経済好況のもとでも貧困に苦しむ人がいて、社会からの排除が平然と行なわれていることもその一つです。社会的に功成り名遂げることがなく

でも、家族や親密な友人関係の中で、信頼され、尊敬を受けて、愛され、生きがいのある人生を送る人もあるでしょう。そういう人にとって承認はそれほど気になることではないでしょう。

しかし、承認欲求を満たされず渴望する人にとっては、そのような視点での言葉は全く耳に入らないようです。

承認は普通、自分の意志ではコントロールできない、「やる気」の領域にまで影響を与える恐るべき威力をもたらす一方で、承認への執着が、破滅を引き起こすほどの魔力も持っているのです。

(中略)

その典型的一例を、ダイエット願望に見てみましょう。『ダイエット幻想』（ちくまプリマー新書、二〇一九年）の著者で、文化人類学者の磯野真穂は、痩せたいという女性の願望は、痩せれば、健康のために良いとか、生活費の節約になるとかといった合理的根拠があるわけではなく、ただただ痩せたいという願望であり、痩せた女を美的に評価する現代社会の承認基準に合わせることに目的になっているというのです。その非合理性は、昔の中国の纏足を想起させます。纏足の女性はうまく歩けないばかりでなく、足の変形のため、激痛やけがに苦しみましたが、それでも当時の男性に認められたい一心でした。纏足で変形した骨の形は今のハイヒールの形と同じです。

痩せたい女性は、認められるためには栄養失調になったり生理が止まったり、骨粗鬆症こつそしょうしょうになって健康を犠牲にしても、周りから褒められ承認されることを求めているのでしょう。

一方で、日本社会では個性の強い承認欲求を社会的圧力によって抑圧もするのです。个性的で自分の欲求を強く持つ女性は、往々にして疎まれます。美しさで目立つのはいいけれども、自己主張の強くない、保護される対象であるかわいい女が評価される傾向があります。評価を気にして生きる女性③は、エンジンとブレーキを同時にかけることを要求され、結局は他人が認める範囲の中でのみ、承認される結果を受忍しなければなりません。

そしてその結果は、何が自分の欲求で何が幸せなのかさえ分からなくなる、と磯野は言います。選ばれる側は選ぶ側の思考や好みを常に最大限に付度し、それに沿った容姿とふるまいをしなければならぬからです。「愛されようとして懸命にもがいた結果、私たちは他者の声に漂流し、溺れてしまう」という磯野の言葉は、なんともの悲しい響きを持っていることでしょうか。痩せたい女性はこの指摘に何と答えるのでしょうか。

(暉峻淑子てるあきしづこ『承認をひらく―新・人権宣言』による)

問一 傍線部①「自縄自縛」の語句の意味として最も当てはまるものをア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分に失望し、希望を失いやけくそになること。
- イ 自分の置かれた環境に縛られ、適応できなくなること。
- ウ 自分の主張に縛られたために、矛盾していくこと。
- エ 自分の主張に縛られてひとりだに壊れていくこと。
- オ 自分の言動に縛られることで自由ではなくなり、苦しむこと。

問二 傍線部②「証拠を残さず目的を達することができるとあるが、本文から適切な熟語をそれぞれ漢字二文字で抜き出し、次の文の空欄①・②に当てはめることでその理由となる一文を完成させよ。

権力者は目的の達成にあたり、①で指示をし、②させるといふ手段を取るから。

問三 傍線部③「エンジンとブレーキを同時にかけることを要求され」る具体例を示している一文を本文中から探し、その始めの五文字を答えよ。

問四 本文の内容に当てはまるものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えよ。

- ア 「承認」とは個人の生死を分けるような情念を持つ言葉である。
- イ 一度受けた承認・名誉を失わないために、ヨコの関係で犯罪を引き起こした人もいる。
- ウ 現在の平和で経済的好況のもとでも貧困や社会的排除に苦しむ人がいることは、正しい承認が行われていない証左である。
- エ 成果主義での「承認」は、能力という承認基準によるため、公正で公平な評価である。
- オ 日本社会では個性の強い承認欲求は社会的圧力により必要とされ評価される傾向にある。

問五 「民主主義の尺度、判断基準において、民主主義のレベルが高い場合に成立しているものは何であるか」を本文の意図を踏まえて本文中から漢字四文字で抜き出し、答えよ。

〔四〕

次の文章を読んで設問に答えよ。

しばらく前に、石川県のある公立高校で、「考える」ということについて、生徒さんたちに向けて語ったことがある。講演を聴いたひとりの女子生徒が書いてくれた感想文のなかにこんな文章があった――

「哲学は、人間の本质について深く疑問に思った時や、そのことによって悩んだり傷ついたりした時に、それを解決する手がかりをつかむための一つの手段なのではないか、と思いました。」

さっと読んだかぎりでは哲学についてのよくありそうな印象を記しているようにみえるが、そのなかの言い回しにわたしの眼は釘づけになった。^①「解決する手がかりをつかむ」という箇所だ。問いに対する答えではなく、その「手がかり」を掴むために哲学があるらしい、というのである。

政治や経済においても、育児や介護にあっても、さらには芸術表現に際しても、不確定な状況のなかでどうするのがよいのかわからないまま、とりあえず事に当たるほかない。正しい答えが一つだけあるわけではないし、みなを満足させられる答えがあるわけでもないし、そもそもこれからじぶんが知ろうとしていること、創ろうとしているものがあらかじめわかっているわけでもない。答えがすぐには出ない、あるいは答えが複数ありうる、いや答えがあるかどうかよくわからない、そんな問題群がわたしたちの人生や社会生活を取り巻いている。そんなときにたいせつなことは、わからないけれどこれは大事ということを抑むこと、そしてそのわからないものにわからないままに正確に対処できるということ、いいかえると、性急に答えを出そうとするのではなく、答えがまだ出ていないという無呼吸の状態にできるだけ長く持ち堪えられるような **A** を身につけることだ、というふうな話をしたのだが、聴いた生徒さんがそれをこんなふうにとまどめてくれるとは想像もしていなかった。そしてとてもすてきな捉え返しだとおもった。というのも、哲学の重要な仕事として、問いの構造じたいを問いなおすということ、問題となつていくことがらへの視点、ないしはアプローチの仕方を吟味するところがあるからである。

ひとには「なぜ？」と、どうしても問わずにいられない瞬間がある。なぜじぶんの生活というのはいつもこうでしかありえないのか。この息苦しさの理由は何か。あるいは人びとのあいだで、あるいは時代のなかで、どんな方向に進んでいけばいいのか。時代がなにか大きく変わりつつあるような気がぼんやりとあるが、いったい何が起ころいつつあるのか。その動きになにか、軸とか構造とかいったものが見いだせるのか……。そういう問いがしばしば **X** を **Y** ②。時代の空気への抑えがたい不安や違和感に、時代はなにかとんでもない方向に動きだしているのではないかと、問いを投げ

返したくなる時もある。つまり問えば問うほど問いは増殖していつて、ついに、^③これまでじぶんが、あるいはじぶんを取り巻く人びとが、それを下敷きにしてみずからの生の軌跡を描いてきたその《初期設定》、あるいはじぶんがこれまで属してきたその社会が依拠する《フォーマット》に、歪みなりボタンの掛け違えなり不都合なりがあったのではないかと、それらを根本から再チェックしたくなる瞬間がある。そして、じぶん（たち）の生をそれに

照らして理解するその《初期設定》や《フォーマット》をあらためて意識の俎上こじょうにのせ、吟味し、場合によってはそれを書き換えることで、より見晴らしのよい（ただし、かならずしも心地よいとはかぎらない）場所に立てるようになること、そのプロセスとして哲学はある、はずだ。

「哲学とはおのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく経験である」——人生の《初期設定》、あるいは社会生活の《フォーマット》をあらためて問いなおすことを、[※]モーリス・メルロ＝ポンティはそのように表現した。「おのれの端緒がたえず更新されてゆく」というのは、それまであたりまえの前提であったことが崩れる、不明になるということである。いいかえると、問うなかで、問いが解消するどころか、逆に増殖してゆくということ、いつてみれば問いたいにある種の地殻変動が起こるということである。その意味で、哲学はとりあえずの解答を得るためのマニュアルではありえない。前提そのものを問いただそうというのだから、問題解決の「手がかりをつかむ」という、あの女子生徒が書いていたプロセスには、既定のマニュアルなどありえないのである。まずは問いのなかに飛び込むこと。以降のプロセスを歩み抜く知的耐性は、問いを問いつづけるなかではじめてついてくる。哲学をどのように使うかを考えるこの作業は、だから、《哲学のアンチ・マニュアル》となることからとりかかる。

（鷲田清一『哲学の使い方』による）

※モーリス・メルロ＝ポンティ：フランスの哲学者（一九〇八～一九六一年）。

問一 傍線部①「問いに対する答えではなく、その「手がかり」を掴むために哲学がある」という主張の理由となる箇所を「くから。」に続くように本文中から二十九文字で抜き出し、その始めの五文字で答えよ。

問二 空欄 A に当てはまる最も適切な語句を本文中から四文字で抜き出し、答えよ。

問三 傍線部②「を

(1) 空欄 に当てはまる最も適切な漢字を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 口 イ 面 ウ 心 エ 頭 オ 首

(2) 空欄 に当てはまる最も適切な語句を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ひねる イ すべらす ウ もたげる エ あげる オ いためる

問四 傍線部③「これまでじぶんが、あるいはじぶんを取り巻く人びとが、それを下敷きにしてみずからの生の軌跡を描いてきたその《初期設定》、あるいはじぶんがこれまで属してきたその社会が依拠する《フォーマット》」を端的に示している語句を本文中から二箇所抜き出し、ともに八文字で答えよ。

問五 傍線部④「おのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく経験である」の説明として当てはまるものを次のア～カの中からすべて選び、記号で答えよ。

ア これまで当然であると理解していたことでも改めて考えなおすことで、解決するどころか余計に不明になっていく経験を繰り返しながら、答えが得られないままに生活していくということ。

イ 問題解決のために問いを立てて考えるうちに新しい疑問が生れてまた問い続けるといふサイクルが生じる中で、明らかにできないままに問い続けるという解消されない状態であるということ。

ウ 哲学は自分の人生に照らして問いに対する解決を用意していくものであるから、場合によってはかならずしも心地よい問題解決にはならないかもしれないが吟味をする必要があるということ。

エ 「端緒」とは「物事の始まりや起点」を指す意味であるから、自分の問題解決のためには起点を定めて問いを立て、その問いを問いつづけるといふことで新しい思考が生まれるということ。

オ 問いそのものが問題解決に役立つのかどうかという問いへの問いなおしを意識的にし続けることによって、社会生活のための新しい解決の手法や考えが身についていくことになるということ。

カ 人間の本質への疑問や悩んだり傷ついたときにはこれまでの社会生活の常識にとらわれない問いを立てることで、新しい考えや解決方法が見つかり、自分に変化が生じるということ。